

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第十五回）

むろ う じ
「室 生 寺」

によにんこうや
（女人高野）

大和の 室原の毛桃 本繁く 一言
むろふ けもも もとしげく

ひてしものを 成らずは止まじ
や

作者・不詳 卷十一―二八三四

（解説）

・大和の室原の毛桃の幹の茂く立つように繁々しげしげと言葉をかけたのだから、きつと恋が実らずに終わることはないでしょう。
・この歌は恋の成就を願って詠った歌であろうといわれる。

①この歌の舞台となった「室原」は「万葉辞典」によると、今「室生」と書き大和国宇陀郡室生村（現在の奈良県宇陀市室生）地方のことを指すとある。

・「毛桃」―桃に毛があるのでいう。
・「本繁」―幹樹が繁く立つので「繁々」という。
・「成らずは」―成就せずには

②「室生」の地は奈良県東北部の高原地帯である大和高原と宇

陀山地に囲まれ、東はすぐ三重県名張市と接する。

③この室生の奥深い山間に天武天皇九年（681）役行者によって開かれたという「室生寺」がある。室生寺は近鉄大阪線「室生口大野駅」から室生寺前行きバスの終点地にある。

④室生寺は和歌山県にある高野山が女人禁制であったのに対して古くから女人の入山・参詣が許されていたことから「女人高野」と称されてきた。

（参考文献）・日本古典文学大系「万葉集」・佐佐木信綱著「万葉辞典」等

（写生地）室生山の山麓から続く石段を上ると杉とヒノキの木々に囲まれ美しい姿を見せる室生寺のシンボルである国宝・五重塔を描く。（池田杏花）

